



東日本大震災に 思いを馳せて



yamanekonoko

むかし むかし

太平洋沖の海底に大きな都市ができました。

大津波に流されたいくつもの小さな町が

海の底に沈んで出来た都市です。

「ママ～いってきまあす」

小さな女の子は学校へ出かけようとしています。

「気をつけて行くのよ

大きなサメには近づいちゃダメよ

わかった？」

「わかってる！って

ほんとにママはうるさいんだから～」

女の子は待っていたお友達の方へ泳いで行きます。

「ごめんごめん

ママがうるさくってさ～

……

見て見て！

ほら水掻きがこんなに大きくなったんだよ！

これで鯛よりは

早く泳げるようになったかもしれないね」

女の子は自分の両手を広げ

指の間にある水掻きを自慢げに見せます。

「早く大人になって

トビウオと一緒に泳ぎたいなあ…

あの水面がキラキラしてる所で泳いだら

地上の町が見えるんでしょう？

ママは

『地上は地震で家が壊され津波で町が流され、とても恐ろしい所』だって

言うけど...

ここから見える町の灯りは

とても綺麗ですものねえ」

女の子は母親が地上で

とても怖い体験をした事を知っています。

しかし

あれから長い年月をかけ

地上の町は昔以上の美しさを取り戻しています。

そして

海底にも美しい町ができました。

そんな様子を神さまはずっと見続けてきました。

「神さま

人間はすばらしい生き物ですね」

「まったくじゃ...

地上の生き物として君臨しておった人間は

空に憧れ、大空を舞い

宇宙に住みかを築き

.....

今度は大きな試練を乗り越え

海の底に住めるように

こんなに短い時間で進化を成し遂げた...

.....

もう彼等は

『神の創造物』ではない！

自ら進化をし続けるエイリアンかもしれないなあ」

青虫

むかし むかし

青虫はキャベツの葉っぱの裏で

ひっそりと暮らしていました。

もうそろそろサナギになる準備を始めています。

「少し早いけど、今日はポカポカと

暖かいから蝶ちょになる準備に取り掛かることにしましょ」

青虫は今までの殺虫剤にも人間の手による虫取りにも

奇跡的に逃れられ

りっぱなサナギになりました。

「もう少しの辛抱で私もきれいな蝶ちょになれるんだわ

この殻から出た時が暖かかったら良いけど...」

青虫がサナギになった頃

大きく育ったキャベツは箱に詰められ

トラックに乗せられました。

トラックは暖かい地方から寒い北国へ走っていきます。

やっと着いたところは

先日大震災で大きな被害を負った地方の避難所でした。

避難所のみんなは救援物資が届いたことを喜んでいます。

箱から出された大きなキャベツは

他の食料と一緒に炊き出しの鍋の横に置かれました。

「ん～良く寝た！

もうそろそろこの殻から出てもいいかな...」

サナギはゆっくりと

ゆっくりと殻から抜け出て来ます。

「えっ！むちゃくちゃ寒いんですけど...

ここはどこかしら？

たくさんの人たちがひとつのストーブで

温まっているけど...」

炊き出しの鍋の横で

一匹の綺麗なモンシロチョウが

キャベツの上にとまっています。

「まあ いいか～

せっかく蝶ちょになれたんだから

少し寒いようだけど

頑張って生きていくことにしましょ...」

モンシロチョウはそう言って避難所の中を飛び回ります。

もうすぐ日本の北国にも暖かい春がやって来ます。

ご先祖様のお彼岸

むかし むかし

お彼岸にはご先祖様が帰ってこられると

仏壇やお墓を綺麗にし

おはぎやご先祖様の好物をお祀りしました。

「惨い事になってしまいました。

生きている彼らの方が地獄にいるみたいです。

しかし

我々が帰る場所もなくなりました。」

ご先祖様の魂たちは

帰るはずであった故郷を茫然と見えています。

「彼岸に里帰り出来ないのは

さびしいけれど...

今まで仏壇に手を合わせ

毎日拜んでもらっていたんだから

今度は我々がお礼をしなければいけません。」

「今回 向こう側にある極楽浄土に行く者たちの

道案内をしてあげよう

.....

親とはぐれた子供たち

子どもと別れた親たち

.....

道に迷わないように...

とても辛い思いをして

向こう側に行かなければいけなくなった者たちが

もうこれ以上

苦しむことがないように...」

「では私たちは

この地獄に生き残った者たちを

見守っていきましょう

1日も早く

我々がまた前のような美しい故郷に

里帰り出来るように...」

「希望の光を照らしてあげよう

生き残った者たちが

目標を見失うことがないように...」

ご先祖様の魂たちは

それぞれ自分に出来ることをしようと

形がなくなってしまった故郷でとどまることにしました。

震災から9日ぶりに奇跡的に助かった命があります。

9日ぶりがあったのなら

10日ぶりがあっても...

今日はお彼岸の中日です。

ご先祖様の魂はそこらじゅうにいます。

私たちは守られています。

ありがとう

むかし むかし

あるところにとっても大切に育てられた

女の子がいました。

女の子の両親は

女の子がやさしく育つように願いました。

両親は女の子にいつも言います。

「ありがとう！は？」

女の子はお友達からおもちゃを貸してもらいました。

「ふん・・・」

知らん顔をしてそのおもちゃで遊んでいます。

「ありがとう！は？」

女の子は大人の人からお菓子をもらいました。

「・・・・・・・・」

何も言わずお菓子を食べます。

女の子の両親はなかなか子供に恵まれず

やっと授かった女の子の事を

とても甘やかせて育てたことを後悔しました。

ある日

女の子が住んでいる町が

大きな災害に見舞われました。

幸い女の子と両親は命だけは助かりましたが

食べる物も住むところもなくなってしまいました。

多くの住人たちと小さな体育館で

避難生活が始まりました。

誰もが被災者ではありますが

誰もが自ら被災者の為に働こうとしています。

温かい炊き出しが被災者たちの手によって作られ

女の子にも手渡されました。

女の子は

温かい味噌汁が入った紙コップを

大事そうに両手で包んでいます。

「ありがとう...」

自然と女の子の口から出て来ました。

今 苦しいはずの避難所には

『ありがとう』の言葉が溢れています。

ひとつずつ・・・

むかし むかし
小さな島国で起こった

大きな災害は

たくさんの涙とたくさんの力を作りました。

悲しみの涙は次から次へとあふれ出てきます。

涙は地面に落ち水たまりになり

それが小さな湖になりました。

たくさんの人の涙で出来た湖の岸に

小さな花を植えました。

花は咲き、風で種が飛ばされ

湖の周りにたくさんの花が咲きました。

悲しみの涙で出来た湖の岸に

一本の木を植えました。

一本の木は大きく育ち、根を張り

湖の周りにたくさんの木が生えました。

やがて人々の思いが詰まって出来た湖には

小さな魚が泳ぐようになりました。

そこに小鳥がやって来て恋を語りあいます。

「何にも無くなってしまった所に

花が咲き、森ができ

魚が泳ぎ、鳥たちが来るようになった...」

「私たちの涙は...

無駄ではなかったんですね」

「一本の木が森を作り

小さな花が春を教えてくれる...」

人々は手を取り合い喜びを語りあいました。

「こんなに素晴らしい森ができるなんて

思ってもいなかった...

ただ 目の前にできた湖に

花を植え、木を植えただけ...

あの時は

それだけしかできなかった...」

「未来を信じてみてもいいかもしれないですね

私たちの地球は

まだ捨てたもんじゃない...」

「未来を子供たちに託す前に

今私たちにできることを

ひとつひとつやって行きましょう！」

悲しみの涙でできた湖は

小さな森を作り

大きな力を生み出していきます。

カラス

むかし むかし

あるところにとても頭の良いカラスがいました。

カラスは人間がすることをいつも観察しています。

やがて人間の言葉をまねることができるようになりました。

🎵カ～ラ～ス～なぜ鳴くの～👉

幼稚園のお庭で保育さんが子供たちと手をつなぎ

お歌を歌っています。

🎵カラスの勝手でしょう～👉

子供たちの頭の上でカラスが歌の続きを歌いました。

「もう 知らない！」

「ごめん、ごめん

許しておくれよ👉」

デートの途中、他の女の子に見とれてしまった男性が

彼女の後を謝りながらついて行っています。

👉月に変わってオシオキよ💕

カラスはそう言って男性の頭に糞を落とします。

魚市場ではマグロの解体ショーをやっています。

カラスはその上を飛びながら、こう言います。

👉おまえはすでに死んでいる

サッカー場にカラスの姿がありました。

スタジアム横のポールの上で長い間とまっていたカラスは

闇夜の中に消えて行きました。

翌日 瓦礫の山を下に見下ろしながら

カラスは円を書くように飛んでいます。

「がんばろう 日本!!

がんばろう 日本!!

.....

カズ～」

カラスはそう言いながらずっと飛び続けていました。

I will be back

むかし むかし

赤ちゃんが生まれた記念に

一本のサクラの木を植えました。

サクラの木は子供の成長に合わせて大きくなっていきました。

今年も春がやってきました。

見事に開いたサクラの花に小鳥たちが寄ってきます。

「今年も綺麗に咲きましたね」

「ありがとうございます。」

しかし今年は誰も

私の事を見に来てはくれません。

いつも私の健康管理をしてくれたご主人様は

ここから遠く離れたところで避難生活をしています。

.....

私の周りには何もなくなってしまいました。

.....

大きく地面が揺れ

大量の海の水が押し寄せてきました。

.....

本当にあっという間の出来事でした。

.....

私の横をたくさんの車や壊れた家が

流されて行きました。

.....

私の幹を掴もうと多くの人が

手を差し出して来ました。

.....

でも、どうすることもできませんでした。

.....

私自身も流されまいと立っているだけで

精一杯でした。

.....

本当に何もできなかったのか...

今でも考えてしまいます。」

小鳥たちは慰めるように囁きかけます。

「仕方なかったんです...

誰も

なにもできなかったんです...

あなたはあの塩水にも負けず

こんなにきれいな花を咲かせたではありませんか...

それだけで十分です」

サクラの木の枝が風になびきます。

まるで泣いているように・・・

「でもここで咲いていても

誰の心を癒してあげることもできません。

私の周りは瓦礫だけです。」

小鳥たちはサクラの枝を飛び移りながら言います。

「そうだ！

僕たちがあなたの種を

どこか小高い所へ持って行ってあげましょう

そこで新しく生まれ変われば

また前のように

みんなから褒められ

みんなを癒してあげることができるようになります。」

「いいえ

わたしはここにいます。

……

私は種から生まれ変わったら

もう私ではなくなるのです。

……

ご主人様が遠くの避難所へ行く前に

私のところへやって来ました。

まだ つぼみさえ付けていなかった私を見上げ

こう言いました。

I will be back !

映画好きのお調子者のご主人様です。

あの明るさは

力強い未来を感じさせてくれます。

.....

必ずここへ戻ってくると信じて待っています。」

サクラの木は瓦礫の山の中で

誰にも見られることなく咲いています。

きょうのわんこ

むかし むかし

町の中で自由に暮らしているわんこを

野良犬と人々は呼びました。

「お～元気だったか？」

「ああ、なんとか...

生き延びれたようだ」

「そいつは良かった...

あのしっぽのないノロマは

津波に持って行かれたよ...」

「ああ

あの時はどこへ走って逃げればいいのか

わからなかったからなあ...」

人々が眠りについて静まり返った町に

野良犬たちは集まって来ました。

「それじゃあ、

そろそろ、出かけるとしますか...

我々は小学校の方を見まわって来ます。」

「私たちは残っている民家の方へ行って来ます。」

「何か変わった事があれば

大きな声で呼んでください。

すぐ、みんなが駆けつけます。」

野良犬たちは震災のあと

町の中を見まわるようになりました。

「僕たちはずっとこの町の人たちに

とても良くしてもらってましたから...

こんな時くらい

なにか恩返しをしないと…」

「そうですね

まだ食べ物が届いて来ない時でさえ

『こんな少力で悪いなあ…』と言いながら

私にもビスケットを分けてくれました…」

「昨日は長い間

海の上で漂流していた仲間を

助けてもらったようです」

「ありがたいことです。」

「今 我々ができること・・・

あの優しい人達が

安心して眠れるように

夜の間は我々がこの町を守りましょう…」

野良犬たちはそう言って四方に散らばって行きました。

月明かりが野良犬たちの影を大きく映し出しています。

ねずみとねこ

むかし むかし

神さまは『元旦に挨拶に来た順に

1年づつその年の大将にしてやろう』と

動物たちに言いました。

震災で大きな被害が出た地域で

高台にあった一軒の家の屋根裏では

ねずみたちが騒いでいます。

「だって～僕は言ったんだよ！

猫さん、もうすぐ地震が来るよって...

みんなに知らせなきゃって...

でも信じてくれないんだ！

.....

『お前みたいな嘘つきの言うことなんか誰が信じるか！』って...

あんな昔のことを

まだ根に持っているんだ！」

「神さまが言った日にちを1日遅く猫さんに

教えたことかい？

それで元旦に間に合わず

干支に入れなかったことを

ずっと恨んでいるんだろ・・・」

「そんなのきちんと自分で確認をしないから

いけないんだろ！

世の中には聞き間違いや言い間違いだってあるんだ！」

「それはそうだけど...

あの時は猫さんに嘘をついたよね...

そのうえ、牛さんの背中に乗って行って

神さまの前に着くなり、背中から飛び降り

一番のりしたんだ...」

「うっ・・・

でも！

今回の地震は本当にわかったんだよ！

大きな地震が来るって...

猫さん早くみんなに知らせて逃げなきゃって...

そう言って僕は走って逃げたんだ...」

「嘘を一度つかれて騙されると

なかなか忘れることはできないんだ...

今回の災害で

長い間あった神さまへの信頼がなくなってしまったんだ...

信頼を取り戻すのにも

とても長い時間が必要なんだ...」

「神さまは何をしたの？

今回の災害は神さまのせいなの？」

「いや違うよ...

でも、守ってあげられなかった...

本当は守りたかったはずだよ

神さまだもの・・・」

「そうか...

神さまでも信頼を回復するのは

とても難しいんだね...

それなら

ねずみが猫に追いかけられるのは

仕方がないんだ...」

「今は追いかけてくれる猫さんの数も

あの震災で

少なくなってしまったけどね...」

ねずみたちは追いかけてっこをして

遊んでくれる猫さんがいなくなったことを

寂しく思っています。

日本と言う国

むかし むかし

日本と言う国は

とても働き者の国民と

美しい風景が自慢の小さな島国でした。

「今年も綺麗な桜の花が咲いたわね

これはアメリカさんのおかげ...」

「きれいな小川にメダカがいっぱいおよいでいるわね

ニュージーランドの人たちのおかげだわ」

「電車の車窓から見える山々の緑が

なんて美しいんでしょう...

オーストラリアのみなさんに感謝、感謝」

「子供たちの笑顔が

いきいきしててなんて楽しそうなんでしょう...

ドイツの方へは足を向けて寝られないよね...」

「お年寄りたちも穏やかな表情をしてるわ

台湾の人たちが助けてくれたから...」

「みんなでお花見ができるって幸せよね...

中国のみなさん、ありがとう！」

日本中のあちらこちらから聞こえて来ます。

大きな震災で壊滅状態になった日本は

世界中の人たちの善意のおかげで

一から作り直されました。

これからの日本は

感謝の気持ちを絶えず持ち続けている国民と

世界中の優しい心が敷き詰められた風景が自慢の国になります。

アルバム

むかし むかし

大きな津波により家も町も

何もかも無くなってしまった年に

生まれた女の子がいます。

女の子が生まれた時の写真には

電気もついていない病室で不安そうに

生まれたばかりの赤ん坊を抱いている母親の顔が写っています。

1歳になり女の子は仮設住宅の前で

母親に抱かれて笑っています。

小さな鉢植えのチューリップの花と一緒に写っています。

2歳になった女の子は新しく建てられた家の中で

大きなクマのぬいぐるみを抱いて微笑んでいます。

部屋の中には家具は少ししかなく殺風景な感じがします。

3歳の女の子は家の近くの小さな公園の

滑り台の上でピースサインをして写っています。

後ろにはまだたくさんの空き地が見えています。

4歳の頃、女の子はやっとできた幼稚園で

たくさんのお友達と遊んでいる姿があります。

遠くの親戚に身を寄せていた保母さんが帰ってきました。

5歳では桜まつりのぼんぼりの下で

大きな口を開けておむすびを食べようとしている女の子がいます。

みんな桜の木の下で嬉しそうに笑っています。

6歳になりました。

女の子は小学校の入学式で真新しい洋服に身を包み

少し緊張している顔が写されています。

しかしみんなの顔には喜びと希望に溢れた笑顔がありました。

女の子のアルバムには

女の子の成長とともに

この町の復興の様子が写しだされています。

この町の歴史を目の当たりにしながら

女の子は大きくなっていきます。

女の子が成人した時

アルバムにはどんな町が写っているのでしょうか。

とてもワクワクします。

福沢さん

むかし むかし

大家族の福沢さんは

日本中に出張して仕事をしていました。

久しぶりにみんなが一か所に集まりました。

「やあ 調子はどうだい？」

「最近、景気が悪くってねえ...

暇で暇で仕方がないよ」

「やっぱり、そっちもかい？」

私も長い間金庫に入れられたままだったんだよ

でも今日は

百万人の僕と一緒に

こうやって仕事をさせてもらえる事になったんだ

なんだか、うれしいねえ」

「ふ～ん

百万人はすごいねえ・・・

僕なんか

長い間食卓の家計簿の上で

穴が開くほど見つめられて

『仕方ない！給料日までお茶漬けで我慢してもらおう...』

って、やっと送りだしてくれたんだよ

でも気持ちはわかるんだよね

オカンのお財布の中には

野口英世くんしか見えなかったからさ・・・」

「僕は今思い出してもいやになるけど...

お酒臭いおっさんが僕を

隣に座っていた若い女性の

大きな胸の谷間に

僕を突っ込むんだよ・・・

思わず顔が真っ赤になってしまった...」

「え～いいなあ

.....

いや...

それで君はとても良い匂いがしているんだね

僕なんか

じいさんのパンツの匂いだよ.....」

「なんだい？」

そのパンツの匂いって？」

「じいさんが年金をこつこつと

タンスの中に貯めていたんだ...

銀行は当てにならないって...

泥棒に盗られちゃいけないって言うんで

僕の上にじいさんのパンツをのせて

隠していたんだよ

.....

今回はやっぱり長い間

悩んでいたみたいけど

.....

ほっとけなかったんだね...」

「そうだね・・・

僕たちをここへ送り出してくれた人たちは

みんな同じ気持ちなんだよ

その気持ちに応えられるように

頑張らないとね！」

「私はできれば子供がいる所がいいなあ...」

「僕はやっぱりじいさんがいいや...」

「大丈夫だよ

どこへ行っても

みんな感謝してくれるよ

きっと

僕たちが一番輝けるような

使い方をしてくれる...」

多くの福沢さんたちは

自分の出番を今か今かと待っています。

「それにしても

いつまで待たすんだろう・・・

早くしてくれないかなあ～」

たんぽぽのように

むかし むかし

子供の頃・・・

訂正！

ちょっと むかし

春になると

たんぽぽの茎笛を作って

プー・ピー……スー？

鳴らしながら学校から帰ったものでした。

いてて👉

ま～た ふんづけてった✖

今日はこれで3人目だわ！

誰も私のことなんか気にしてないものね...

でも花が咲いたら

きっと気付いてくれる...

もう少しの辛抱だわ

いた～い！

もう！またあ👉

こらあ*

つぼみが見えないか～

下を向いて歩きなさい！！

あ～あ やっと伸びかけた茎が曲がっちゃたじゃない👉

これじゃあ 茎笛を作っても

綺麗な音はでないわよ・・・

仕方ないなあ

もうちょっと頑張って伸びてみましょう

えっ！

いや〜ん💧

おしっこ、かけないで！

そこの犬！

あっち行きなさい❌

今年は寒かったから

ただでさえ、遅れてるのに...

がんばろう💎

きっと待っててくれる

みんな私が綺麗に咲くのを待っててくれる

がんばろう💎

子供たちが私の茎笛で遊ぶのを

楽しみにしているもの

犬のおしっこ、かかっちゃったけど...

乾いたら平気よね

黄色い花がいっぱい咲いたら

首飾りを作ってもらいましょう

白い綿毛ができれば

おもいきり遠くへ吹き飛ばしてもらいましょう

寒い寒い冬の間じっと耐えて

何度も何度も踏みつけられて

黄色い花をつけたら摘みとられるけど

それでもたんぽぽは

毎年春になると必ず

綺麗な花を私たちに見せてくれます。

私たちもたんぽぽのように・・・

必ずきれいな花を咲かせましょう。。。

座談会

むかし むかし

『三人寄れば文殊の知恵』と言うことわざがあったように

たくさんの頭が集まれば、さぞかしりっぱな結論に

導かれるであろうと誰もが期待をしました。

司会者 「え～、本日はお忙しい中お集まり頂き

まことにありがとうございます。

東日本大震災より1ヶ月と言うことで

まずは皆さんで1分間の黙とうをお願い致します。」

全員 「・・・・・・・・」

司会者 「ありがとうございます。

それではこれより座談会のほうを

始めさせていただきます。」

オカン 「今日は何の集まりや？」

司会者 「オカンさん、お隣の方にコソコソ聞かずに

どうぞ大きな声でおっしゃってください。」

オカン 「いや～すみません...

なんやけったいな人ばかりやから

何の集まりかいな...思うて」

司会者 「.....

みなさまに参加のお願いの用紙を

お配りした時に本日の趣旨は

一番初めに書かせて頂いていましたが...

目を通して頂いていませんか？」

オカン 「最近、目が遠うなってきたて文字を読むん

きつうなってるんやわ」

司会者 「そうですか...

本日は東日本大震災から1ヶ月過ぎ

これからの日本をどのように

復興させていけば良いのか

今日お集まりのみなさんで考えて頂きたいと

思いまして、このような座を設けさせて頂きました。」

新米サギ師 「あの～、僕は場違いのような気がするんですが…」

司会者 「いえいえ、新米サギ師さんは

直に被災地を訪れていますので

避難所の現状から見えて来る問題点などを

教えてください。」

オカン 「えっ！あんたサギ師なんか？

ほな、うちの義援金返してえな

夕方の忙しい時来て

お金持って行ったよな…」

新米サギ師 「あの時は頂いてません！

しゃべるだけしゃべりまくって

さっさと中へ入って行ったじゃないですか…」

オカン 「え～～～

司会者 「オカンさん、少し黙っていてください。

話が前を向いて進みません。

．．．．

神さま、何か神さまの立場から

今回の件について

おっしゃりたい事はございませんか？」

神さま 「ん！わしは

オカン 「あんた神さまなんか？

神さまやのになんでこんなヒドイことするんや？

みんな一生懸命生きてるだけやのに

あれはひどすぎるやろ！」

司会者 「オカンさん！ちょっと黙っていてください！」

オカン 「．．．」

神さま 「わしは何にもしておらんぞ！

実は今まで内緒にしておったんじゃが...

今回の地震で大地をつかさどる神が

負傷しておる...

地層のずれを少しでも治そうと

早くから頑張っておったんじゃが...

自然の力には勝てなかった・・・

あの3月11日2時46分にプレートに挟まれてのお...

だから、1ヶ月経った今でも

大きな余震が何度も起きるんじゃ...

大地をつかさどる神が元気であれば

もう少し余震も減っているはずなんじゃが...」

ねこさん 「神さまにもできないことが有るのですね...」

オカン 「あっ！あの気色悪いねこ...

司会者 「オカンさん！」

オカン 「・・・」

神さま 「自然の前には、わしらなんて紙くず同然じゃよ...

この地球ができて46億年じゃ...

わしらが人類を創ってたかが500万年くらいしか経ってない...

敵うはずがないじゃろ・・・」

ポンタのばあさん 「しかし、あの原発の事故は良くありません。

日本は原子力の恐さは良くわかっているはずですよ。

もう、あのようなことはコリゴリです。」

オカン 「そや！原発はあかん！

あんなもん、作ったさかい

こんな事になったんや...

地震と津波だけなら

みんなで頑張ればなんとかなるのに...」

ねこさん 「しかし、オカンさん...

今まで原子力発電のおかげで

日本はこのように発展を遂げてきたのです。

皆さんの生活だって

原子力発電のおかげで

とても便利になったではありませんか…

今の皆さんに

私のような生活ができますか？

テレビもクーラーも電車もない…」

オカン 「……………」

ポンタのばあさん 「……」

私は大丈夫ですが……

若い人たちは無理でしょうね…」

新米サギ師 「とにかく、被災地のみなさんは

この1ヶ月ただ命を繋ぐだけで

精一杯だったはずですよ。

これから自分で生活していくためには

やっぱり、お金ですよ。

今の世の中綺麗事だけでは

生きていけません。

お金があれば何でもできる！

詐欺訓練学校の教えです。

仕事もない！

家もない！

でも口はある！

口は上手に使いば

大きなお金になります。

……

やっぱり、ダメですか？」

全員 {……………}

集まって役に立つのは人数の問題ではないようですね

約束

むかし むかし

東日本に大きな震災がありました。

遅い春を待ちわびた虫たちは

長い冬眠からやっと覚めることができました。

へびさんが地中から顔を出した所は

小高い丘の一軒家の庭先でした。

その家からは変貌した町の様子が見渡せます。

一人の美しい少女が穏やかな海を見ながら

声も出さずに泣いていました。

なんて美しい人なんでしょう・・・

へびさんは少女に恋をしてしまいました。

へびさんは少女に声をかけます。

「どうして泣いているのですか？

私に出来ることがあれば言ってください。

なんでもします。」

美しい少女は少し驚きましたが

ゆっくりと言いました。

「先日の津波で

私の両親が海に沈んでしまいました。

あれから毎日のように

大地のひずみが悲鳴を上げています。

ミシツミシツと・・・

あの大地のひずみが正されない限り

私の両親を探しに行く事が出来ません。

もし、あなたにできるのであれば

大地を鎮めてください。」

へびさんは少女にこう言いました。

「わかりました。

では私が大地のひずみを正して来てあげましょう。

とても難しいことです。

でも私は美しいあなたのために

なんとかやり遂げてみせましょう・・・

その代わりに

大地が鎮まりあなたの元に

両親が帰って来た時

私のお嫁さんになってください。

きっと幸せにします。」

少女はしばらくの間考えていましたが

へびさんのお嫁さんになる約束をしました。

「私の元に両親が帰って来た時

その事を告げる合図として

海に一輪の赤いバラを投げ入れましょう。

そうしたら私の前に出て来てください。

約束通り結婚しましょう・・・」

ヘビさんは喜んで今出て来たばかりの地中へ戻って行きました。

それから何日かすると

大地の揺れはピタッとおさまりました。

町の人たちは復旧工事を始めることができました。

海に流された人たちの捜索活動も再開されました。

少女はヘビさんとの約束のことはすっかり忘れてしまい

長い年月が過ぎました。

最近になって日本の太平洋側の地中深くに

数えきれないくらいのヘビが

地層のプレート間に絡まるように挟まっているのが発見されました。

無数のへびたちは大地の間にできた

ひずみを自分たちの身体を使って埋めていったのです。

化石となったへびたちの中に

あの日のへびさんがいたことは誰も知りません。

ツバメの巣

むかし むかし

人々は低空飛行をしているつばめを見ると

もうすぐ雨が降り出すからと

足早に帰ったものでした。

寒かった北国にもようやく春の日差しが感じられるようになりました。

つばめたちがその陽気に誘われるように

自分たちの巣に帰っていきます。

「ここへ帰って来る途中

いろんな噂を聞いたけど

わたしの巣は大丈夫かしら？」

つばめは昨年の秋に巣立った古巣を

目指して一生懸命飛んで行きます。

「わたしたち鳥はインフルエンザにかかって

みんな死んでしまうって

誰かが言っていたわね...」

しかし、帰ってみると小鳥たちは楽しそうにさえずり

恋の季節を迎えています。

「やっぱり噂はデマだったんだわ...」

つばめは少し安心して飛んで行きます。

「火山の噴火で大地は灰色一色に覆われ

森の木々も川の魚たちも

死に絶えているって聞いたけど...」

眼下に見える森には新緑の木々が生え茂り

川の水面に魚たちの飛び跳ねたしぶきがキラキラ光ります。

「心配して損しちゃったわ...」

つばめは早く古巣へ帰りたくてスピードを上げます。

「大きな津波にわたしたちの家が

海に呑み込まれちゃったって

教えてくれたけど…」

長い旅を終え

やっと着いたつばめの故郷は変わり果てています。

つばめが目指していた古巣は

場所がどこかもわからないくらい、町ごと無くなっていました。

つばめは山のように積み重ねられている瓦礫の間を

自分の巣を探して低く飛んでいます。

去年の夏、作ったばかりの新しい巣を探して

低く低く飛んでいます。

「やっぱり噂は本当だったのね

.....

帰っても無駄だって...

.....

でも巣作りに必要な泥も枯れ草も

こんなにたくさんあるんだもの

またイチから作ることにしましょう

早くしないと恋の季節がやって来ちゃう...」

人々は低空飛行をしているつばめを見て

新しい巣作りができる軒下を

早く提供できるように頑張らなければ・・・と一生懸命働き続けます。

日本のヒーロー

むかし むかし

日本のヒーローたちが一堂に会して

誰が一番世の中の役に立っているか

競い合っていました。

「僕がやって来たらもう大丈夫です。

安心してください。」

ウルトラマンは胸を張って言います。

「僕のスペシウム光線の威力は

地球上のどんな物でも

一発で破壊してしまいます。」

「ダメです！

破棄してしまったら

放射能が地球上にばら撒かれてしまいます。」

「それでは

僕には力があるので

海の水を何万 t も一度に運んで

核燃料を冷やしてみせましょう。」

「それではトレンチの中の水が

増えてしまいます。

トレンチの中の放射能に汚染された水を

これ以上外へ出す訳にはいけません。」

張り切ってやって来たウルトラマンは

自分の勇姿を見せる手段を考えています。

ピコンピコン！

ウルトラマンの胸の赤いランプが点滅し出しました。

「おっと・・・

もう3分間が来てしまった

エネルギーが切れてしまう前に帰らなければ...」

シュワッチ！

ウルトラマンは故郷のM78星雲に帰ってしまいました。

次に登場したのは

ご存知ドラエモンです

パンパカパンパンパ〜ン 🍷

どこでもドアー ✨

「ぼくがこの

どこでもドアーで

作業員のみなさんを

お風呂に入れてあげましょう

さあ！

この扉を開けるとそこには

みなさんの家のお風呂場です。」

「わぁ～やめてください！

その扉を開けると

放射能が漏れてしまう！

せっかく我々が家族を守るために

頑張っているのに

何にもならなくなってしまいます。」

そこへアンパンマンが飛んできました。

「みなさん

どうぞ僕のこの頭を食べてください！

僕はジャムおじさんにまた焼いてもらえば

大丈夫です。

僕の頭を食べて

元気を出してください！」

「ありがとうございます。

しかし食べ物なら

ここに山ほどあります。

すべてインスタント食品ですが...

それに

もうアンパンマンさんは放射能に汚染されていますから

食べる訳にはいけません。」

セーラームーンがリボンを振りながらやって来ました。

月に代わってオシオキよ💖

「いえ・・・

オシオキは

この事故の収束がついてからお願いします。」

テクマクマヤコン・テクマクマヤコン💖

さて

誰でしたっけ？

テクマクマヤコン・テクマクマヤコン📍

お姫様にな～れ❤️

「・・・・・・・・」

なんで？」

『やっぱりこの国を守れるのは自分たちしかないのだ』と

作業員たちは現場に戻っていきました。

八十八夜

むかし むかし

湯呑の中にお茶の茎が縦に立つと

縁起が良いとされて来ました。

しかし最近では茶柱を見つけることはできません。

急須の中からこんな会話が聞こえて来ます。

「どう？出られそう？」

「う～ん、ちょっときついなあ...

なんで最近の急須って

こんなに網目を小さくしちゃったんでしょうね...」

「網目が小さくなったんじゃないかって

君が栄養を取りすぎちゃったんじゃないの？」

「失礼ね！

それならあなたが先に出てみなさいよ！」

「それならお先に失礼して...

ん～もう少しなんだけど。

.....

あれっ腰の部分が引っかかって

抜けなくなっちゃった...」

「ほらあみなさい...

出られないでしょ！

.....

でも、せっかく待っていてくれるのに

ここから出て行ってあげたいよね...」

「ちょっと助けてくださいよ

...

このままじゃ苦しくて仕方がないよ...」

「あなたが失礼なことを言うから

そんなことになっちゃうのよ...

押すの？引くの？」

「ん～

ちょっと押してくれれば

お茶と一緒に出られそうなんだけど...

避難所生活でこのくらいの小さな幸せ

感じてもいいよね...

おばあちゃんたちはいつもいつも

僕たちが急須から出てくるのを待っていてくれるんだからさ...

『茶柱が立つと何か良いことがあるかも...』って...

若い人たちのように十年後二十年後の事は考えられないから

せめて大好きなお茶を飲むあいだだけでも

幸せを感じさせてあげたいよね...」

「わかってるわよ...

だから頑張っってこの網目から

抜け出ようとしてるんじゃない！

ほらっ押すから

少し痛いけど我慢してね！

ん～～～

.....

あっ！折れちゃった...」

今日も湯呑の中に茶柱は立っていません。

避難所生活のお年寄りたちには

こんな小さな縁起かつぎもできなくなりました。

むかし むかし

子供たちは貧しい暮らしの中で

輝かしい未来を感じさせてくれるような

ヒーローを作りだしました。

「いったいどうしたんだい？

傷だらけじゃないかい！」

外から帰って来た女の子は涙をこらえながら言います。

「うん...

最後に青空が見たかったから...

そしたらみんなに見つかっちゃって...」

女の子のおにいちゃんは女の子をそっと抱き寄せました。

「おにいちゃんがお前をこんな目に合わせたやつらに

仕返しをして来てやる！」

「だめだよ...

おにいちゃん」

女の子も

女の子のおにいちゃんも

そんなことができないことはわかっています。

「そうだよ、アトム...」

隣にいたまだ新しいのにフロントガラスが

粉々に割れている自動車が言いました。

「そんなことをしたら

余計に反発を買いちゃう...

どうせ、もう最後なんだから

大人しくしとこうや...」

ベルトコンベヤーに乗せられて

次々と潰されていく物たちに希望はありません。

「おれは人様を傷つけるために

作られて来たわけじゃない...

山や海やいろんな所で

おれの切れ味は発揮できるはずだったんだ...」

一回り大きなサバイバルナイフは悔しそうに言います。

「なのに...

あいつがおれを人ごみで振り回したりするから

.....

今思い出してもぞっとするよ

.....

その拳句おれはスクラップ送りさ...

人を殺す為に作られた昔の刀は

りっぱな箱に入れられて大切にされてるのに...

おかしい話だよ。

.....

じゃあな

あばよ」

サバイバルナイフは回転している大きなローラーに
挟まれて行きます。

「僕だって

人なんか撥ねたくは無かったんだ...

目の前におばあさんとその孫が

すごい勢いで近づいて来て...

僕のボンネットに上がりフロントガラスで...

その時の感触が今でも忘れられない...

.....

僕を送り出してくれた車屋のおやっさんは

僕をととても誇らしげな目で見て

ニンニク臭い息をかけて

曇りひとつないように磨いてくれたんだ...

『かわいがってもらえよ』って...

なのに

あいつは酒臭い息をして

僕に乗りやがった...

最初はとても大切にしてくれたけど

だんだん慣れてきたんだろうね

.....」

ベルトコンベヤーで流されていく自動車は

だんだん近づいて来るローラーを見ながら言います。

「僕がいったい何をしたって言うんだい？

僕だって人間の幸せのために

作られてきたんじゃないのかい？

初心を忘れて僕の事を

軽く考えたあいつが悪いのに...さ

.....

今の政治家にだって

初心を忘れてしまっ

じゃまばっかりしているやつらが

たくさんいるじゃないか...

あいつらだって

スクラップにされてもいいはずだよな...

あはは...

じゃあな」

そう言って自動車は大きなローラーで潰されて行きます。

「.....

ウラン

.....

おにいちゃんが先に行くよ

.....

お前が潰されていくところなんか

見たくない！」

アトムはベルトコンベヤーの上に飛び乗ろうとします。

「だめだよ、おにいちゃん

おにいちゃんは今まで

みんなの為にたくさん働いてきたじゃない！

私たちは原発をエネルギーにして

みんなを助けて来たんだよ

.....

もしかするとみんなの

気が変わるかもしれないよ

.....

だから

私が先に行く！

.....

子供たちだって

お兄ちゃんのごことは大好きだったはずだもの...

思いだしてくれるかもしれない...

『原発がなければ...』なんて言わないかもしれない...

.....

本当に原発事故さえなければ

こんなことにはならなかったのに...

.....

原発の恐さを一番わかっていた人間が

安全神話の上に胡坐をかいてしまったせいで

私たちは悪者扱いにされてしまった...

.....

じゃあね

おにいちゃん」

ベルトコンベヤーの先にウランちゃんは消えて行きました。

アトムは

スクラップ工場の扉が開いて

今にも子供たちが走って来そうな気がして

扉の方を見つめていました。

かたつむり

むかし むかし

雨が降ると一斉に黄色い傘の花が咲き

子供たちの楽しそうな歌声が聞こえてきました。

♪で～んでんむ～しむし か～たつむりい～♪

子供たちは黄色い傘をクルクルまわしながら

大きな声で歌います。

♪お～まえのあ～たまはど～こにある～♪

うっとおしい梅雨の季節も

子供たちにかかれば

キラキラ新しい発見がいっぱいです。

「あ～、カタツムリがいるう～」

一人の男の子がアジサイの上にいる

カタツムリを見つけました。

「おっきいね～」

子供たちは珍しいものでも見るように集まって来ました。

別の男の子が自慢げに言います。

「これ、食べられるんだよ

フランスでは高級料理なんだから...」

「ええ～、うっそだあ～

気持ちわる～い...」

「うそなもんか！

パパが言ってたもん！

サザエみたいでおいしいって...」

「じゃあ、パパに持って帰ってあげたら

「喜ぶんじゃない？」

「そうだね

もうすぐ父の日だし...」

子供たちは父親が喜ぶ顔を想像して

瞳を輝かせています。

「それじゃ、もっといっぱい探そうよ」

子供たちはそれぞれにカタツムリを探し出しました。

「いたよ～

ここにもいるよ～」

子供たちは楽しくて仕方がないようです。

「ねえ

ここにお家がないカタツムリがいるよ

どうしちゃったんだろねえ」

「ほんとだ！

お家を背負ってないや！

……

津波に流されちゃったんじゃない？」

おませな女の子は知ったかぶりをして言います。

「だって、こんなに雨が降ってたら

私たちにはどうってことない雨だけどさ

こんなにちいさなカタツムリにとっては

きっと大雨なんだよ！

カタツムリのちっちゃなお家なんか

屋根から落ちて来る雨水だけで

津波が来たみたいに流されちゃうんだよ」

「へえ～」

周りにいる子供たちは感心したように言います。

「そうだよね

きっと、そうだよ

.....

かわいそうだね

お家が無くなっちゃったんだ...」

一匹のなめくじの周りで子供たちは

真剣に考えています。

「お家を探しているのかなあ...

ほら、あそこにもいるよ」

「ほんとだ

いっぱいいるよ！」

「お家を探してあげようよ...」

その時一番わんぱく者の男の子が言いました。

「こんなにいっぱいいるんだから

捕まえて持って帰ろうよ！

お家で料理する時は

どうせカタツムリのお家は取っちゃうんでしょ

それなら

最初から無い方が料理しやすいよ」

「えええええ～

かわいそうだよ～

お家がないカタツムリはだめだよ」

女の子たちは口々に男の子を非難します。

「信じらんない！」

「かわいそうすぎる！」

わんぱく者の男の子も負けずに言い返します。

「なんだよ！

家があるカタツムリは良くって

家を無くしたカタツムリはダメなんて

おかしいだろ！

そしたらさ

家を無くしたカタツムリの

家を探してやっからなら

食べてもいいのかよ」

「……………」

「……………」

一番おとなしそうな女の子が言いました。

「でも、ママが言ってたよ

お家を無くした人たちの生活保護は

打ち切っちゃったらだめだって...

お家を無くした人たちは

みんなで守ってあげなきゃだめなんだって...」

「.....」

「.....」

「今日はもうカタツムリはいらないや...

全部逃がしてあげようよ...」

「うん、そうだね

父の日はいつもの『肩たたき券』だけでいいよね」

そう言って子供たちは

捕まえていたカタツムリを全部

アジサイの花の上に逃がしてやりました。

あれから

むかし むかし

真っ黒い波に飲み込まれて

幼くしてこの世を去った魂たちは

きれいなお花畑でかくれんぼをしています。

「しい～

しゃべっちゃダメだよ

見つかったちゃうでしょ...」

子供たちの背丈ほどあるお花は

黄色いジュータンを敷き詰めたように咲き誇っています。

「だって...

さっきから花びらが

首筋にあたってくすぐったいんですもの...」

気持ちのいい風がお花畑の間を通り抜けて行きます。

「とっても良い匂い...

「なんだか眠くなっちゃった」

「わたしも...」

暖かい日差しの中

子供たちはウトウトし始めました。

「.....

ん～

「またサイレンが聞こえる...」

「.....

遠くの方で

「う～～～って...」

「なんだろう...」

「確かこれで5回目だよね」

子供たちはお花の間から

そっと顔を出し

音が聞こえて来る方を眺めます。

サイレンの音はとても悲しく響いています。

その音を聞いていると

忘れていた大切な何かを思い出せそうな気がしてきます。

しかし

このお花畑にいと、とても楽しくて

大切な何かを忘れていたことも忘れてしまいます。

悲しい音色のサイレンが止むと

子供たちはまたかくれんぼを始めます。

「動いちゃダメだよ

見つからないようにしないとね」

「おにさんは誰だっけ？」

「誰だっけ？」

「このお花畑に来てからずっと

誰かが私を探しているような気がするけど...」

「おにさんは

きっと

とっても優しい人なんだよ」

「うん

そんな気がする...」

「でも

かくれんぼだもの...

隠れないと...」

「おにさんに

見つからないように

……」

あれからずっと

行方不明になっている子供を探す親たちは

毎日毎日

海に向かって子供の名前を呼んでいます。

サンタさんにお手紙を書こう

むかし むかし

おとぎ話の国のサンタさんは

世界中の子供たちに

夢と希望を届けていました。

サンタさんへ

僕は今年いろんな事に頑張りました。

自転車にも乗れるようになりました。

ひらがなも書けるようになりました。

おじいちゃん家のポチにも

少しだけ触れるようになりました。

それから

.....

え〜と

.....

転んで怪我をしたけど泣きませんでした。

ちょっと涙が出たけど我慢をしました。

お婆ちゃんがいっぱい褒めてくれました。

「えらいねえ

よく頑張ったねえ

もう泣き虫さんは卒業だね」って

僕の頭を撫でながら

お婆ちゃんが泣いていました。

お婆ちゃんはガリガリのしわくぢゃなのに

どこからあんなにいっぱい涙が出て来るのか不思議です。

新しい保育所の先生が

「もうすぐクリスマスだから

サンタさんにお手紙を書こう」って言いました。

「サンタさんはお願い事を効いてくれるかもしれないから]って...

そうか...

去年はお手紙を書かなかったから

パパがサンタさんになって

自転車をプレゼントしてくれたんだね

本物のサンタさんへ

自転車に乗れなくってもいいです

ひらがなが読めなくってもいいです

ポチに触れなくってもいいです

また泣き虫に戻ってもいいです

だから

今年一年間を無かったことにして下さい。

そしたら

パパもママも

前の保育所のお友達も死ななくて済みます。

海の近くにあったお家も

飼っていたハムスターも...

お婆ちゃんも

あんなにガリガリのしわくちゃにならなくてすんだと思います。

また4歳からやり直しだけど

もっともっと頑張るから

去年の今日に戻して下さい。

お願いします。

フィンランドに住むサンタさんに

子供たちの夢や希望は届きますが

本当の願い事は届きません。

むかし むかしに起きた悲しい出来事は

少しずつ差し込んでくる希望の光に

ゆっくりと心を開いていきます。

は～い

なんですか

僕はここにいますよ

どうしたの？

急にお返事なんかして...

ん？

誰かが僕の名前を呼んだんだ

だから返事をしたんだけど...

そう？

ママには聞こえなかったけど

誰が呼んだんでしょうね

は～い

なんですか～

また

お名前を呼ばれたの？

うん

さっきからいっぱい...

みんなが僕の名前を呼んでるんだけど

なんだか

僕に用事があるわけじゃないみたいだ

.....

あの時、車に乗らなかつたら...

あの時、早く逃げていたら...

あの時、手を離さなかつたら...

あの時.....

みんなが僕の名前を呼んでいるだよ

タラちゃん

それはあなたの名前を呼んでいるわけじゃないのよ

みんな今まで言えなかった言葉が

今日は溢れ出てしまうだけ

黙って聞いていてあげましょう

まるで昨日の出来事のように思い出す 3・11

今まで一生懸命前を向いて頑張ってきた人たちに

今日だけは立ち止まってあの日の事を振り返る時間を与えてください。

東日本大震災に思いを馳せて

<http://p.booklog.jp/book/89568>

著者：山根仔のこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuzunohaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89568>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89568>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ